様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２８５０

研究課題名（和文）日本語分析における意味特徴の分析と明示的説明を支える対比技術の研究

研究課題名（英文）Analysis of Semantic Characteristics and Comparison Techniques Supporting Explicit Explanation in Japanese Language Analysis

研究代表者
坂口　和寛（Sakaguchi, Kazuhiro）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：７０３０３４８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、類義語分析において日本語母語話者が行う対比の特徴と問題点を明らかにした。類義語を対比して分析する手続きは、類義語が共有する意味特徴について程度差を探るタイプと、ある意味特徴に関する類義語間の相違点を探るタイプに大別できる。対比のタイプは説明される意味特徴と関わり、程度差を探る対比は抽象的で曖昧な意味説明となりやすい。また、程度性で説明できる意味特徴しか明らかにされない。一方、ある特徴に関わる相違点を探る対比では、類義語対を個別に分析し、それぞれに特有の意味特徴を詳細に説明することにつながる。日本語母語話者の類義語分析では、対比によって程度差を強調するという傾向が窺える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
対比は類義語分析の自然な手続きである半面、その使用により分析の妥当性が低下しうる。この問題は、程度差を強調する対比に起因する可能性が、本研究の成果より指摘できる。異なるタイプの対比を偏りなく意識的に使い分けることが、対比による効果的な類義語分析に必要となる。また本研究では、対比による分析を示す11種の語句をテキストマイニングで抽出した。このうち「より」「の方が」などの助詞（相当句）は程度差を強調する対比と関係し、「一方」「対して」などの接続表現はある特徴に関する相違点を探る対比と関係する。これらの言語マーカーを活用し、対比を使い分けて類義語分析を行うトレーニング方法が検討できる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the characteristics of and issues in the comparisons made by native Japanese speakers in their analysis of quasi-synonyms. Quasi-synonyms were compared and analyzed using two main sets of procedures: one investigated differences in the degree of similarity of the semantic characteristics shared by the quasi-synonyms, while the other investigated the differences between quasi-synonyms relating to a given semantic characteristic. The comparison of differences in degree in relation to the semantic characteristics tended to produce vague explanations. Furthermore, it clarified only those semantic characteristics that were capable of explanation through degree. In contrast, when the differences between terms associated with a given characteristic were compared, each quasi-synonym pair was individually analyzed, leading to detailed explanations of the semantic characteristics particular to each term.

研究分野：日本語教育学

キーワード：類義語分析　対比　意味分析　日本語母語話者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)言語研究者と同様に、日本語教師（以下、教師）が行う日本語分析においては、他の語句との比較を通じて分析対象語句の特徴を探るという手続きが一般的に採られる。教師の場合は特に、類義関係にある語句や既習項目との比較を行うことで、指導対象となる日本語の弁別的特徴を探るという手続きが重視される。

(2)何らかの基準や観点から類義関係にある語句と対比によって分析対象語の弁別的特徴を明確化するという日本語分析技術は、教師の日本語力と日本語指導力の基幹をなす。日本語教師養成課程の被養成者を対象に本研究者が行った調査でも、類義語分析において、特定の観点からの対比により類義語の意味特徴の説明を試みるという傾向が見られた。養成場面においては、対比によって日本語を分析する技術を積極的に扱うことが重要といえる。

(3)以上のような重要性の半面、類義語分析における対比の利用が弁別的な意味特徴の明確化に対して有効に機能せず、逆に不正確で妥当性の低い特徴説明を生じさせる場合がある。具体的には、類義語対の一語の分析に用いた基準や観点をもう一方の語の分析にも用いて対比することは、類義語間の相違点を明らかにできる場合もあれば、分析自体の妥当性や正確さを低める可能性もある。教師にとって対比は基本的で有用な分析技術である。そのため、そうした分析技術が日本語分析において引き起こす問題への対処は喫緊の課題である。

(4)日本語分析においては、例文とそこから得られる情報の活用が重要である。意味を始めとした言語特徴の分析に際しては、例文からの手がかりを損なわぬよう留意して言語特徴へ抽象化する必要がある。対比的な分析は例文分析においても有用な手続きと考えられるため、言語特徴だけでなく例文の分析も射程に入れて、対比的分析の意識的かつ適切な活用を検討する必要があろう。

２．研究の目的

“ある特定の基準や観点からの比較によって日本語の弁別的意味を見出す”という対比的分析の手続きを探り、日本語教師の日本語の分析および指導に不可欠な「対比」のストラテジーとその効果的使用を明らかにする。

(1)対比の使用が必須と考えられる類義表現分析を取り上げ、類義表現対の意味特徴説明に見られる対比のストラテジーの実態と特徴を探る。特に、対比的な分析を行うことが意味説明の正確さや妥当性を低下させてしまう「対比のわな」という問題に焦点化し、対比が類義表現分析の成功に寄与しない事例から、対比という日本語分析ストラテジーの特質と問題点を探る。

(2)(1)の成果を基に、日本語教師の自律的な言語分析力の向上を目的とした「日本語分析ストラテジートレーニング」を検討し、特に意味特徴の分析や説明を支える技術の向上策を探る。

３．研究の方法

(1)概要：日本語母語話者への調査によって得られた記述データを用い、類義語分析において比較や対照を行い類義語対の特徴や相違点を探るという分析行動を観察した。記述データについては、対比行動を示す言語マーカーを手がかりに、類義語対を対比している箇所を抽出して研究対象とした。それにより、対比的な分析において焦点化される言語特徴とその説明内容、対比方法などの点に見られる傾向や問題点を探った。その結果を基に、類義語分析において弁別的特徴を的確に見出すための対比の方法や技術と、その効果的運用に関する留意点を検討した。そして、日本語分析において効果的に対比を行うストラテジーを養成する方策を検討した。

(2)調査対象者：本研究は、日本語の指導や意識的な分析の経験がない非教師の日本語母語話者として、日本人大学生を調査対象者に選定した。日本語の専門知識や指導経験が反映されない類義語分析における対比的分析を観察するためである。さらに、本研究の成果を、熟達度の低い教師や被養成者の言語分析技術向上策につなげるためである。

(3)類義語分析課題：調査では、類義語対に関する分析と意味説明を求める課題を調査協力者に提示し、その記述をデータとして収集した。調査協力者は、示された類義語対の意味内容を分析し、調査用紙（A4 紙 1 枚）に記述する（制限時間 10 分）。このとき、日本語学習者への指導は想定せず、調査協力者自身にとって自然な形での自由な分析を求めた。

(4)分析課題に用いた類義語対：中級以降の日本語学習段階で類義関係が問題となりうる類義語対として「っぽなし／まま」と「疲れる／くたびれる」を選定し、類義語分析課題に用いた。また、対比を用いた分析の内容の妥当性が確認できるよう、類義語対の弁別に重要で、調査協力者が言及する可能性がある言語特徴を整理し、記述データの分析に用いた。

(5)データの分析方法：①テキストマイニングの手法を用いて、類義語分析記述において使用されている日本語を解析し、使用頻度の点から特徴的な語句を抽出した。②抽出された語句のうち、類義語対を対比していることを示すものを、対比的分析を示す言語マーカーとした。それらを手がかりに、類義語対を対比して分析し説明している箇所を分析記述中から特定し、本研究の対象とした。

４．研究成果

(1)①調査によって収集した日本人大学生 72 名分の類義語分析記述をデータとして用い、類義語対「っぽなし／まま」の分析でなされた意味説明の内容とその特徴を探った。類義語分析の記述をテキストマイニングの手法で分析し、類義語対の意味特徴について調査協力者が行った説明

の中に使用されている日本語表現を解析し抽出した。そして、出現頻度の点から、「っぱなし／まま」の意味特徴説明において特徴的と考えられる日本語表現を特定した。また、弁別的な意味特徴に関する説明の明晰さという点から分析記述を評価し、調査協力者を二群に分けた。これにより、テキストマイニングで抽出された日本語表現と類義表現分析の成否とを関係づけて、意味特徴説明に見られる特徴や問題点、傾向を探った。
②「っぱなし／まま」の弁別的意味をより明確に説明できていると評価された調査協力者群は、両語の弁別的意味を簡潔な語句によって端的に、そしてより的確に説明している。また、端的な説明だけにとどまらず、類義語対それぞれの意味特徴をより詳細に説明していることが、テキストマイニングで抽出できた言語要素から窺える。
③一方で、類義語対の意味特徴説明が不十分と評価された調査協力者群の場合、説明に用いられている語句の抽象さや曖昧さが目立つ。また、用法や用例の文法性など、意味とは異なる言語特徴への言及が多いことも窺える。弁別的意味の明確化が十分になされず回避される半面、用法的な特徴に焦点化して分析がなされる傾向が把握できた。さらに、テキストマイニングにより、対比を用いた分析を示す言語要素「の方が」が相対的に多く抽出された。こうした結果は、類義語対を対比して弁別的特徴を探ろうとする分析手続きが、実際の類義語分析では必ずしも有効に機能しない可能性があることを示唆している。
(2)①調査により収集した日本人大学生 40 名分の類義語分析記述をデータとし、類義語対「疲れる／くたびれる」の分析においてなされている対比的な分析の特徴を探った。分析記述に用いられている語句をテキストマイニングでの解析によって抽出し、そこから、類義語対を対比して分析していることを明示する言語マーカーとしての語句を特定した。具体的には、1)助詞（複合形式と助詞相当句を含む）「より／よりも／よりは／よりか／の方が／の方は」、2) 副詞「より」、3)接続表現（接続詞と接続表現を含む）「対して／それに対して／一方／のに対して」という 11 の語句である。
②11 種の言語マーカーを手がかりに、類義語対「疲れる／くたびれる」を対比して各語の言語特徴を探っている部分を分析記述から特定した。そして、意味特徴を中心に、対比によって分析し言及されている類義語対の言語特徴とその内容を探った。全体的な特徴としては、「疲れる／くたびれる」が表す「疲労状態」という共通意味を中心に、対比によって多面的に意味特徴が分析されていた。また、調査協力者の分析には用法に関する言語特徴に焦点化して対比している様子も見られた。言語化して明確に説明することが困難な意味特徴とは別に、用法特徴は程度差などの点から比較がしやすく、特徴づけがされやすいものと考えられる。
③分析の手続き面に着目すると、「疲れる／くたびれる」の分析において調査協力者が行った対比的な分析は、「ものさし型」と「スポットライト型」という二種類に大別できる。このうち「ものさし型」の対比は、類義語対が共有すると考えられる言語特徴に焦点を当てて、その程度差を探るという手続きでの対比である。ものさしを用いて長さや大きさを測り比べることと同様に、特定の基準・観点に基づいて二つの類義語を比べ、その特徴における程度差を相対的に把握しようとする手続きである。
④「スポットライト型」の対比は、ある言語特徴に焦点を当て、その下位的な特徴に見られる相違点を類義語間で明らかにするという手続きである。対比の大枠や観点としてある言語特徴に焦点化し、そこに含まれる下位的特徴についての異なりを探ることで類義語の違いを明確化するものである。壇上のある部分にスポットライトを当て、そこから照射部分を切り替えて別の部分を明らかにするように、ある言語特徴を基準として、その下位特徴に関する類義語間での有無や相違点を探る手続きである。
⑤「ものさし型」および「スポットライト型」という二つのタイプは、対比によって明らかにされる言語特徴との関係性が認められる。本研究で取り上げた類義動詞「疲れる／くたびれる」の場合は、表す意味の広さや、疲労の度合い、疲労の原因となる事がらの時間的長さなどが、ものさし型の対比によって説明がなされていた。また用法特徴に関しても、使用の頻度や範囲、フォーマリティについて両語が比較されていた。一方、スポットライト型の対比では、特に疲労状態という意味特徴に関わる両語の異なりが強調されていた。具体的には、疲労状態における老化現象の有無、疲労の原因となる事がらの性質上の違い、身体的疲労と精神的疲労という違い、疲労の生じる身体部位の違い、疲労状態にある主体の異なりなどの説明が、スポットライト型での対比に見られた。スポットライト型の場合は、類義語対が共有する疲労状態について具体的な側面からの分析がなされている。
⑥「疲れる/くたびれる」の対比的な分析においては、相対的な程度の差を強調するものさし型が積極的に使用される傾向が見られた。しかし、程度差の説明にとどまりやすく、特徴説明が表面的なものになりやすい。それに対してスポットライト型の場合は、類義語それぞれに特有の意味特徴にも焦点が当たり、説明がなされている。調査協力者がスポットライト型の対比により言及した言語特徴は類義語対の弁別性を示唆するものも多い。そのため、ものさし型に比して、スポットライト型の対比は弁別的な言語特徴の発見に資する可能性が指摘できる。一方で、程度差の強調によって類義語の違いを明確化できるものさし型は、分析者にとって使用しやすい対比手続きといえる。その半面、程度差による特徴づけでは弁別的特徴が明確化できない類義語もあり、必ずしも有用な手続きとはならない点に留意すべきである。
(3)日本語分析技術を養成するストラテジートレーニングへの応用：本研究においてテキストマイニングにより抽出し特定した、対比的な分析を示す言語マーカー11 種は、二つの対比のタイ

プとの関連性が窺える。具体的には、「より／よりも／よりは／よりか／の方が／の方は」といった格助詞を中心とした言語マーカーは、ものさし型の対比に使用される傾向がある。一方で、接続表現「対して／それに対して／一方／のに対して」は、スポット型の対比により多く用いられている。こうした対比の型との関係性や親和性に留意し、本研究で得られた言語マーカーを、対比という日本語分析ストラテジーの養成や習熟に活用するという方策が提案できる。例えば、言語マーカーを明示することによって対比の枠組を固定し、そのうえで類義語の分析を促すという方法が考えられる。以下の例においては、【 】部分は対比の 2 タイプに強く関わる言語マーカーで、この枠組に沿って類義語対の差異や相違点を分析し記述することを求めている。

［例］ものさし型の対比を促す枠組と類義語分析

「疲れる」【より】「くたびれる」【のほうが】［　　］。

［例］スポットライト型の対比を促す枠組と類義語分析

「疲れる」は［　　］。【それに対して/一方で】「くたびれる」は［　　］。

日本人大学生による類義語分析の観察の結果、非教師の日本語母語話者の自然な類義語分析ではものさし型の対比が無意識的に選択され多用される傾向が指摘できる。そこで、類義語をはじめとした日本語の分析において活用が望ましい対比ストラテジーには、大きく二つのタイプがあり、それらの強みと弱みを認識し、偏りなく意識的に使い分けることが不可欠である。このことは、有用な分析技術である対比の積極的な使用がかえって日本語分析の妥当性を低下させるという「対比のわな」に陥らないための、重要な方策である。そして、対比的な分析を支える分析技術の養成に際しては、スポットライト型の対比についての明示的指導と、使用機会を十分に設けることが重要と考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 坂口和寛	４．巻 6
２．論文標題 類義表現分析において日本語母語話者が行う意味特徴説明	５．発行年 2019年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 169-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂口和寛	４．巻 5
２．論文標題 類義表現の例文分析において言語化される例文の意味内容―使用される日本語表現が示唆する例文分析の傾向	５．発行年 2018年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 157-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考